

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

かげの棲息者
長編推理小説

昭和44年12月5日 初版発行

昭和49年11月5日 28版発行

著者 佐賀 潜

東京都新宿区喜久井町36

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀内 文 治 郎

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sen Saga 1969

(分)0-2-93(製)02172(出)2271 (0)

長編推理小説

影^{かげ}の棲^{せい}息^{そく}者^{しや}

佐^さ賀^が 潜^{せん}



カッパ・ノベルス

目次

ある事故死	5
もぐら作戦	35
雪代 ^{ゆきよ} の身辺	67
眠 ^{ねむり} 狂 ^{きやう} 四郎	98
恋ひとすじ	129
男の慕情	147
第二の事故死	171
払い下げ許可書	203
見えてきた影	221
影の棲息者 ^{せいそくしゃ}	245

245 221 203 171 147 129 98 67 35 5

本文のイラスト・辰巳四郎

ある事故死

1

東京都文京区白山御殿町——。

植物園裏に、広い国有地がある。周囲を有刺鉄線の垣でかこい、鬱蒼と樹木を茂らせている。植物園の裏になっているから、古びた万年塀のかこいの中は、陽の光りを透さぬほど、樹枝が重なり合っていた。

大正年間に、電灯会社の集金人が、白昼、この通りで殺され、金を奪われる事件が発生した。その後も、何度となく女が襲われたり、殺人未遂事件が起きている。

田茂雪代が、国有地の裏側に、軽量鉄骨二階建てのアパートを建て、木村今朝吉と一緒に住むようになったのは、昭和三十六年の夏である。

この土地三百三十平方メートルは、国有地の中に住む旧華族桜小路綾麿の所有地だった。桜小路の知遇を得

て、彼の用人のような仕事をしていた木村が、ほとんどただ同然の値段で買い受けたものだ。

が、これを登記するとき、木村は、雪代の名義にした。総建て坪百八十平方メートルのアパートも、雪代の名まえで建築申請をやり、その保存登記も田茂雪代としてある。

東京の旧市内としては、めずらしいくらい閑静で、自動車はほとんど通らず、人通りも少なかった。

雪代は、当初、こんな気味のわるい環境で、アパートを建てても、借り手がないだろうと思った。が、新聞広告を出すと、たちまち、満室になってしまった。

六畳の和室と八畳のダイニングと、バス、トイレがあり、電話付きで家賃二万円が、相場より一万円も安かった。ので、入居者が集まったようだ。

雪代は、木村と一階の角の部屋に住んでいた。その部屋だけは、二部屋のスペースを使い、六畳二間の和室と八畳の洋間、ダイニングとバス、トイレとなっている。

この建築費、一千万円は、ぜんぶ木村が都合した。雪代は、その金をどうして工面したのか聞いてみたが、木村は、「ちよいとした仕事で儲けたのさ」と言っていて、笑いでまぎらわした。

雪代と木村は、正式の夫婦ではない。木村には、妻があるからだ。雪代は、昭和三十二年三月、B女子短期大学を出ると、東西電鉄株式会社へ入社した。雪代が、入社すると秘書室勤務となったのは、たぐいまれと思えるほどの美貌だったからだ。

身長は一メートル五十二センチで、低いほうだったが、ハイヒールをはいた足の形がよく、黒地のアンサンブルを着た姿は、女優のような美しさだった。

顔の輪郭が小さく、その割りに眼が大きかった。白色の肌に、まつ毛の濃い二重瞼の眼が、印象的だった。中高鼻は形がよく、口元になんともいえぬ愛敬があった。

笑うとき、口元をゆがめるクセがあり、ならびのいい白い歯がこぼれる。肉付きのいい体質だったが、いわゆる着細りするタイプで、洋裁のデザイナーが、「なんていい体つきなんだろう。お作りする私も、張り合いがありますわ」と、溜息まじりに言うほど、姿がよかった。

木村は、東西電鉄の社長室へ、出入りしていた。冗談のうまい男で、「今日も観音さまに、拝顔の榮に浴した」とか、「雪代さんは、超現代的美人だよ」、「ぼくは君のことを考え、年甲斐もなく眠れぬ夜をすごしている」などと言った。

雪代は、バージンではなかったが、木村からあからさまに賞められると、顔を赤らめた。

そのころ、木村は四十八歳だった。一メートル七十五センチもある長身を、英国製の背広で包んだ姿は、みるからにダンディだった。

「実は、ワイフとそりが合わず、秋田の実家へ戻ったままなんだ。離婚を考えているが、めんどくさいんで、そのままになっている。君にその気があるなら、考えてくれんか」

と、なんのてらいもなく木村から言われたとき、雪代の気持ち動いた。

週末を利用し、箱根に一泊旅行をこころみ、雪代は木村と結ばれた。雪代は、自分がバージンでなかった理由を、次のように説明した。

「私は、両親に死に別れてから、大森の叔父の家に引き取られ、高校、短大を卒えました。その家に、従兄にあたる一郎という私より三つ年上の大学生がいます。一年ほど体の関係がございました。一郎が、谷川岳の登山で死んだのです。もし、生きていれば、結婚したはずでした」

「まあいいさ。過去は問わないのがぼくの主義でね。現

在、愛し合えれば、それでいいのさ」

木村は、轟落に答えた。

二人は、文京区林町のアパートで同棲生活をはじめた。七年前のことである。雪代は、木村のすすめもあって、同棲後も東西電鉄へ勤めていた。

五年前、植物園裏にアパートを建て、移り住むようになってから、勤めをやめたのである。

木村の話によると、その経歴は、次のとおりだ。

東京大学の法学部を出て、警察へ勤め、刑事畑を歩き、県の刑事課長を最後に退官し、桜小路綾麿の秘書をしていたが、常勤を辞め、フリーな立場で、諸事 承り役——のようなことをしている。

桜小路は、戦前、伯爵で貴族院議員をしていた。戦時中、大臣の椅子にすわったことがあり、戦後はいろいろな事業に手を出したが、成功している仕事はない。

植物園裏の国有地に住むようになったのは、彼が国務大臣をしているとき、大蔵省へ顔をきかして、払い下げの口約を取ったからだといわれている。

木村は、一日に一回は、桜小路邸に顔を出し、それから出歩いている。ときどき、外泊することもあるが、必ず、「大阪へ三日間、×××に必ず帰る」とか、「伊豆

へ行ってくる」、「名古屋、二日」というように、雪代に言い残していく。

二人の間に子どもはなく、依然として、入籍はしていない。

同棲してから、七年も経つから、はたからみてうらやむほど仲がいいわけではない。また、口争いもしたことなかった。

ただ、木村は、将来について大きな希望を持ち、雪代もそれを期待していた。

「まもなく、億というまとまった金がある。別に、悪いことをするわけじゃないよ。正々堂々と儲かるんだ。そうになったら、二人で世界一周旅行をやらなくか。世界中をみて歩いてから、その金で何をやるか、考えようと思っているんだ」

「まあ、うれしいわ。行ってみたいわ。アメリカやフランス、英国じゃなく、アフリカとか、南米とか、ヒマラヤとか、あんまり人が行かないところへ行きたいの」「あんたの好きなところ、どこへでも行くさ。だいぶ、苦勞をかけたからね」

木村は、そういつて、雪代の額に軽いキスをした。雪代の入籍問題について、聞きもしないのに、木村が

口に出した。

「のびのびになっている、あんたとの夫婦の届け出……
まとまった金がいれば、ただちに実行に移す。もう数
カ月経てば、一切が解決するよ」

雪代は、木村が氣にかけてくれるだけでうれしかった。
現在の境遇は、二号である。

木村が、事実上、妻と長年別居しているとはいえ、愛
人か、二号に変わりはなかった。

雪代は、アパートでぼつねんとしていたとき、ふと、
たまらないほどの不安におそわれることがあった。

へ木村の氣が変わり、別れる——といえば、私は、なん
の主張もできない。ただ、木村の愛を信ずる以外に、一
日だって生きていられないような立場が、薄氷の上にい
るようだ」

「おねがいよ。口にこそ出さなかったけど、本当は、心
配だったの」

「言えばよかったのに……」

「あなたを、信じていたのよ」

「信じられちゃ、僕も、長生きして、あんたをしあわせ
にする責任があるね」

「私は、ふら下がっていくだけよ」

雪代は、木村に唇づけを求めた。

二人は、いつになく熱っぽいキスをした。木村が、
「じゃあ、下田しもだへ行く。あさって帰るから」といって、
出て行った。

雪代は外へ出ると、木村の後ろ姿が、白山の方向へ曲
がるまで見おくっていた。

これが、木村との最後の別れとなったのである。

2

雪代が、警察から、「木村今朝吉さんは、お宅のご主
人ですか」と、電話で聞かれたのは、その翌夜の十時ご
ろだった。

雪代は、警察——と聞くと、不吉な予感にふるえ、

「は、はい、木村の家内でございますが」
と答えた。

「実は、ご主人が、お宅のすぐそばで、死んでいるん
です。すぐ来て貰もらいたい」

「なん、なんですって……主人が……」

雪代は、電話口に、うわずった声をかけた。

「お宅を出て、植物園の裏へ出る。右へ曲がり、百五十



此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertor.com

メートルほど行ったところですよ」

「すぐ、参ります」

雪代は、草履ぞうりをつっかけると走った。強い風が吹きさび、雪代の髪をとばした。両側の樹木が、ざわざわと枝葉を鳴らしていた。

懐中電灯の灯の輪がみえた。

雪代は、人垣の中へまろびこんだ。道路の右側、国有地の有刺鉄線の垣のそばに、幅七、八十センチの溝みぞがあり、木村らしい男が、うつぶせになって、水の中に浸ひたっていた。●

雪代は、スコッチの荒柄あらがらの上着をみて、木村にちがいないと思った。

「あなたっ、どうしたの」

と、雪代は、喉のどにからんだ叫び声をあげ、水びたしになっている木村に、しがみついた。

警官が、木村の頭を両手で押え、顔を向けた。細面の鼻の高い顔は、まぎれもなく木村今朝吉だった。

雪代は、声をあげて泣いた。六、七人の私服の刑事や、制服の警官が、雪代を遠まきにしていた。雪代は、泣きやんだ。

「奥さん、ちょっと」

と、私服の刑事の一人が言った。

雪代は、立ち上がると、刑事に頭を垂れた。

「木村今朝吉さんにまちがいありませんね」

「は、はい……」

「失礼ですが、正式の奥さんじゃないようですね」

「そうです。本妻は、秋田のほうにいまして、私と七年前から、一緒になっております」

「木村さんの職業は？」

「この国有地の中に、お住まいになっていらっしゃる桜小路さまの、家令のような仕事をしていました」

「今、お住まいになっているアパート、あれは、誰の所有名義になってます？」

「私の名まえですの」

「お子さんは、いないようですね」

「おりません」

「ご主人は、いつ、お宅を出たんですか？」

「昨日の朝、十時ごろ……」

「どこへ行かれるといわれたんですか？」

「伊豆の下田へ、一泊の予定で行くから、明後日、つまり、明日帰ると申していました」

「用件は、なんでした？」

「さあ、私には、さっぱり……桜小路さまのお仕事だったと思いますか」

「失礼ですが、お二人の仲はよかったですか」

「はい、仲はよろしゅうございました」

「申しわけないが、遺体は、解剖にするんで、お引き渡しできません」

「という……何か、事件でも……」

「今のところ、はっきり申しあげられないが、他殺の疑いもあるんです」

雪代は、「ええっ」と言つて、語尾を飲みこんだ。木村がだれかに殺された。そんなことがあるのだろうか。

今まで、一度だって、他人から恨みをうけるようなことは聞いたことがない。木村は、性格も明るかったし、暗い面はなかった。交際はそれほど広くなく、ごく限られた範囲のようだった。

雪代は、木村の知人を、だれかれと頭の中で追いながら、自宅へ戻った。呼吸が乱れていた。

キツチンで、冷たい水を飲み、ぼんやりと木村の生前の姿を思い出していた。

やさしかった折り折りの言動が、眼底に映り消えた。昨日の朝、出がけに、いつになく長いキスを交わしたこ

とが、死の暗示のように思えてきた。入籍の話を持ち出したり、世界旅行をしよう——などと、従来、口にしなかったことをしゃべったのも、死の予感があったからではないのか——。

雪代は、考えているうちに、いくらか落ちつきを取り戻した。

飾り戸棚から、スコッチウイスキーを取り出し、ポットのお湯でレモンティーをこしらえ、思い切り多量のウイスキーを注ぎ入れた。

カップを口に当てたとき、アルコール度が強すぎると思ったが、半分ほど飲んで、太い溜息をついた。

タバコをくわえ、ライターの火を移す。味の悪い煙を軽く吸って、吐き出した。

煙の行方を茫然と眺めていると、これから先、一人でも暮らしていかなばならない寂寥が、胸を噛んだ。

生活費は、アパート家賃が月々十八万円ずつはいるから心配はないが、なんとしても心細かった。

二十二歳のときから七年間、木村に寄り添って生きてきた。

十九年の年のちがいはあったが、木村は、年齢差を感じさせないほど、若々しかった。肌の色に艶があつて、

四肢^しの筋力は、青年のように張っていた。

雪代は、木村との房事の仕草を思いうかべると、それをかき消すように、レモンティーを飲みほした。眼の縁^{よち}が、はれぼったい感じがした。眼先がぐらついてきた。

酔ったのかと思ひ、何度も、大きな呼吸をした。雪代は、立ち上がると、木村の机の前まで行き、あたりを見まわした。引き出しをあけた。

本棚を順々に見て、下の開き戸をあけた。中に棚があつて、ノートや茶封筒入りの書類がのせてあつた。ノートを取り出して開いた。

そのとき、入口のブザーが鳴った。

雪代の胸が、波を打つ。

今ごろだだろう、と思ひながら立ち上がると、足音を忍ばせてドアに近寄り、覗き窓から外をうかがつた。白髪の長髪をみて、安心して、ドアを開けた。

桜小路綾磨が、「今、警察から聞いた。えらいことになった」と言つてはいつてきた。

桜小路は、六十歳の半ばに達しているが、五十そこそこにはしか見えないほど、精悍^{せいけん}な顔をしている。体格がよく堂々とした押し出しだ。

雪代は、桜小路のオーバーを取る、奥の部屋へみち

びいた。

桜小路は、自分の家のようにふるまい、床の間を背にしてあぐらをかいた。

「雪代さん、木村は殺されたんじゃ」

重く沈んだ声が、いきなり彼の口元からとび出した。

雪代は、白髪に覆われた顔をみつめながら、

「やっぱり……それで……なぜなんです？」

と詰まった声をあげた。

「だれだかわからん。が、木村を殺すことによって、利益を擱^おむ奴^{やつ}が、何人かいる」

「なんの利益でございましょう？」

「わしの住んどる二万七千平方メートルの土地じゃ。国有地になつとるんで、この払い下げをめぐって、利権亡者どもが、うようよしとる。木村は、わしのために働いた。だから、殺した犯人は、わしと利害が対立してる奴ということになる」

「まあ……なにも存じませんでしたので」

「木村の死は、わしの片腕、いや、両腕をもぎ取られたようなもんじゃ」

「私も、これから先、どうしていいか……希望もなくなりました」

「雪代さん、あんたどうする？」

「ここにいるより……」

「なんなら、わしの屋敷へ来とってもいいよ。遠慮することはない」

「はい……ありがとう存じます。木村の遺骸を葬とむらってから、どうするかを考えたいと思っておりますが……」

「それもそうじゃな。ところで、あんた、警察官に質問されたようじゃが、何を聞かれ、何を答えたんじゃね」
「二人の仲のこと、昨日の朝、木村が伊豆の下田へ行くといつて出たこと、帰宅は、二泊して帰るといったこと……そんなことだったと……」

桜小路の眼が、鋭く光った。青く澄んだ冷たい眼に、炎が燃え立つような感じだ。

「下田行き——しゃべったのか」

「いけなかったのでしょうか」

「言ってしまったことは仕方がない。これから、いろいろな者が、あんたに聞きにくる。昨日、どこへ行くともいわず家を出た——と言えがいい。よけいなことは、一切、言わんことだ」

その語尾に、重く力がこもった。

雪代は、じっと眼を据えた。桜小路の眼が、柔和さを

取り戻した。

彼は、内ポケットから、金包みらしい茶封筒をさし出すと、「これ、香典だ」と言った。

3

雪代は、香典袋をちらりと眺めた。ひどくふくらんでいるので、香典のような気がしなかった。

「さっそく、いただいて、申しわけありません」

と言って、袋を掴み、ていねいに頭を下げた。手のひらに感ずる札束が気になった。雪代は、香典袋を違い棚の上にのせた。

「今日は、あいにく朝から大雨じゃった。ふだんなら、木村君が死んどった溝、から溝だが、水があふれとった。雨さえ降らにゃ、死ななかつたかもしれん」

桜小路が、雪代の顔を、まじまじと見ながら言った。

雪代は、桜小路の視線をうけ、どぎまぎして、眼をそらせた。

白髪で覆われた顔は、芸術家のような感じがするが、二重瞼の大きな眼に、燃え立つような光りがみなぎっていたからだ。

雪代は、「はい、雨さえ降らなかつたら……」と、気の
ない返事をしながら、桜小路の眼光の意味を考えてい
た。

「雪代さん。わしは、どんなことがあっても、木村を殺
した手をつきとめてやるぞ。木村を消せば、わしの力が
弱まるとでも、思っているのか。馬鹿め……桜小路綾麿
は負けやせん」

「もし、殺されたのなら、警察が犯人を捜してくれるの
じゃ、ございませんか」

「警察じゃわかりやせんよ。敵は強大な権力者だ」

「まあ……そんな……」

雪代は、声を飲んだ。

「敵は、わしの手から木村をもぎ取った。奴らにちがい
ない」

「だれなんでしょう？」

「そりゃわからん。影だ。影の棲息者だ」

「影……」

だれの影なのか。それとも、見えない黒い手が、木村
を殺したのだろうか——。雪代は、木村をめぐるだれか
れを思い出そうとした。が、それらの顔は、影のように
記憶の中からうすれていく。

「雪代さん、あんた一人で、ここにいるのは危ない。あ
んたも、木村のように、狙^{ねら}われているからじゃよ」

桜小路の声が重く沈んだ。

雪代は、自分の体が、こきざみに震^{ふる}えているのを自覚
した。

へなせ、私が狙われるのか。私は四年間、東西電鉄の秘
書室につとめていた。あとは、木村今朝吉の陰の妻とし
て、ひっそりとくらしてきた。よろこびも、苦しみも、
木村と共に分け合い、しっかりと肩をよせ合ってきた。
他人に恨まれることは、何もしたおぼえがない。桜小路
は、「敵」という言葉を使うが、なんのための敵なのだ
ろうか」

「木村は、何をしていたんです？」

「わしの秘書として、何もかもやってくれていた。それ
だけじゃ」

「そのお仕事が、なぜ、敵をつくりましたんですの」

「わしにも、よくわからん。言えることは、わしの財産
をねらっている奴が、たくさんいるということじゃ」

「財産を……」

「そうじゃ。わしの二十億円の財産じゃ」

「そんなに、たくさん財産？」

雪代は、桜小路の財産は、ほとんどないのではないか
と思つていた。木村が、生前、ときどき語つたところによ
ると、「御前は氣が多くて困る。やたらと事業に手を出
し、何一つまとまったもんがない。みんな失敗だ。そ
の尻ぬぐいで、駆けずりまわるのはやりきれない」と、
聞いていたからだ。

「わしの財産は、土地じゃ」

「二十億円もの値打ちのある土地が……どちらに……」

「すぐ眼の前にある。二万七千平方メートル、九千坪近
い土地……」

「まあ……今、おすまいの土地は、国有地じゃございま
せんか」

「そうじゃ。けどな、わしが払い下げをうけておる」

雪代は、口を噤んだ。

木村がいうには、

「御前の住んでいる土地は、まだ国のものだ。御前の権
利になっちゃおらん。御前は、もと、僕たちが住んでい
る百坪足らずの土地に住んでおられた。戦前はざっと千
坪あったんだが、戦後、ぼつぼつ手ばなして生活費に当
てられた。最後にのこった百坪を、われわれにただ同然
の値段で売ってくれた。御前は九千坪の国有地に住まわ

れているが、居住権すらあるのかなのか、あやしい」
と、洩らしたことがある。

木村の言葉が、正しいなら、桜小路は、権利なくして、
国有地を占拠していることになる。

へこの土地の問題と、木村の死が、どんなつながりがあ
るのだろうか。桜小路は、権利があるといっているが、
木村は、否定していた。どちらを信じたらいいのだろう
か。

「木村は、御前さまのお住まいになっている土地につい
て、何か、しておったのでしょうか」

「この土地を、わしの手から奪い取ろうとしていた奴ら
と、たたかっていたんじゃ」

「たとえば……どなた……」

「あんたが勤めていた東西電鉄も、その一人じゃ」

雪代は、危うく舌を噛むほどおどろいた。自分が勤め
ていたころの、社長や側近の顔が眼先に浮かんできた。

社長は、石黒調市いしぐろてんじちといい、二代目で、年は、五十歳の
はずである。東京大学の法学部を出ているが、木村とは
同級の間柄で、親しい仲だった。しょっちゅう会社へ顔
を出し、石黒の経営コンサルタント的な立場に立ってい
たようだ。